論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

報告番号	博(医歯薬)甲第 1119 号	氏名	岡田　侑也
学 位 審 査 委 員	主　査　　泉川　公一 副　査　　中尾　一彦 副　査　　迎　寛		

論文審査の結果の要旨

1. 研究目的の評価

Clostridioides difficile の毒素は、抗菌薬関連下痢症・腸炎の原因として重要であるが、わが国で検出される菌の毒素保有状況は不明である。本研究は、toxin A、toxin B、binary toxin (CDT)の 3 つの毒素について、長崎大学病院で分離された株を用いて、毒素をコードする遺伝子の保有状況、PCR リボタイプによる分子疫学的解析を行い、本菌感染症の疫学的特徴を明らかにすることを目的としており、研究目的として妥当である。

2. 研究手法に関する評価

長崎大学病院検査部で便検体より分離された *C. difficile* 保存菌株のうち、培養で発育が認められた 213 株を対象として、toxin A 遺伝子、toxin B 遺伝子、binary toxin (CDT 遺伝子）を multiplex PCR にて解析し、さらに PCR リボタイピングを行った。さらに、toxin 遺伝子陽性株が検出される患者の特徴を調査しており、研究手法も妥当である。

3. 解析・考察の評価

Toxin 遺伝子の解析では、toxin A、toxin B、CDT 遺伝子陽性株はそれぞれ 134 株（62.9 %）、135 株（63.4 %）、6 株（2.8 %）であった。PCR リボタイプはリボタイプ 047（14.1 %）と最も多かった。Toxin 遺伝子陽性株が検出された群は 65 歳以上の割合が高かった。また、CDT 遺伝子陽性の患者では、全例で下痢を認めた。長崎大学病院における *C. difficile* 菌の毒素遺伝子の保有状況、PCR リボタイプによる疫学的特徴、ならびに臨床的特徴が明らかとなった。

以上のように本論文は日本における *C. difficile* 菌の毒素遺伝子保有状況、リボタイプによる疫学、臨床像の解明への進展に大きく寄与するものであり、審査委員は全員一致で博士（医学）の学位に値するものと判断した。